

「方丈の庵」の居住空間のデザインに関する実践的研究

THE PRACTICAL STUDY OF LIVING SPACE THROUGH “HOJO HERMITAGE”

金子 晋也 札幌市立大学デザイン学部 助教
齊木 崇人 デザイン学部環境・建築デザイン学科 教授
曾和 具之 デザイン学部プロダクトデザイン学科 准教授
不破 正仁 デザイン学部環境・建築デザイン学科 助手
鎌田 誠史 国立有明工業高等専門学校建築学科 准教授

Shinya KANEKO School of Design, Sapporo City University, Assistant Professor
Takahito SAIKI Department of Environmental Design, School of Design, Professor
Tomoyuki SOWA Department of Product Design, School of Design, Associate Professor
Masahito FUWA Department of Environmental Design, School of Design, Assistant
Seishi KAMATA Dept. Architecture, Ariake National College of Technology, Associate Professor

要旨

1212年、鴨長明は「方丈記」を記した。それは、厭世感を表現したもので、わずか3メートル四方の「方丈の庵」で書かれたと伝えられている。それゆえ、「方丈の庵」には余分な機能はなく日本の住まいの原形としてとらえられている。

このような点から、本研究では、「方丈の庵」を日本人の住まいの原形としてとらえ、地域学習の対象として活用することにより、住まいに関する現代的な知見を得ることを目的とする。なかでも、近年の環境と共生する住まいのあり方とその思想の接点を考察するものである。

研究のフィールドは、神戸市西区「みつつけプロジェクト」周辺地区とし、都市再生機構が管理する学園南緑地里山エリアを拠点とした。そこは地域交流の拠点として位置付けられており、様々なワークショップやイベントが計画されている。本研究で計画している「方丈の庵」の製作およびその活用は、地域交流の今後の指針となることが期待されている。研究方法は、①知識の共有、②施工ワークショップという2段階を計画、実施した。このことにより、建築を通じた地域学習のあり方としても新たな展開を示したと考えられる。

Summary

"Hojoki" was written by KAMO no Chomei at "Ho-hermitage" in 1212. There is a philosophy based on a pessimistic view of life. But that hermitage is not the extra function and is the original form of the house of Japan.

The aim of this study is obtained to knowledge about contemporary lifestyle by inflecting as an object of the regional study through "Hojo hermitage".

The subject of the research is "Mitsuike area": Nishi ward, Kobe city. This study based at Satoyama of South Green area; it had been placed as a base of the regional study at "Mitsuike area", and various workshops and events were planned.

The study method planned two phases, ① shared knowledge of "Hojo hermitage" ② construction workshop of "Hojo hermitage". By this method, there is new development as the role of the regional study through the building.

1) 研究目的

「方丈の庵」¹は、鴨長明の居住や都市に関する思想を反映した最小限の住宅である。これは、日本人の住まいの原形を示すものとして、東日本大震災をきっかけとして住まいのあり方を見直す風潮や、『方丈記』が記されてから800年という点からも注目されている²。

神戸芸術工科大学では、故・吉武泰水（元神戸芸術工科大学学長）を中心に「方丈の庵」の建物と場所の双方について解明した研究を行ってきた³。本研究はその一連の研究を背景として、「方丈の庵」から学ぶ日本の住まいのあり方を探求する。

2) 研究内容

本研究では、「方丈の庵」を日本人の住まいの原形としてとらえ、地域学習の対象として活用することにより、住まいに関する現代的な知見を得ることを目的とする。なかでも、近年の環境と共生する住まいのあり方とその思想の接点を考察するものである。

研究のフィールドは、神戸芸術工科大学が「新・郊外居住」の取り組みの一環として進めてきた事業「みつつけプロジェクト」周辺地区とし、都市再生機構が管理する学園南緑地里山エリア⁴（図1）とした。計画は、その中のボランティア団体「舞多聞エコ倶楽部」⁵と神戸芸術工科大学が協同して行う。学園南緑地は地域交流の拠点として位置付けられており、様々なワークショップやイベントが計画されている。「方丈の庵」の製作およびその活用は、地域交流の今後の指針となることが期待されている。

研究方法は、①知識の共有、②施工ワークショップという2段階を計画、実施した。合わせて「舞多聞まちづくり館」にて、月1回の開催、住民とともに活用方法について検討会を実施した。

①「方丈の庵」に関する知識の共有：「方丈の庵」を地域に周知する企画「方丈行灯祭」⁶、方丈跡地（京都市伏見区日野外山）の現地見学会⁷

②施工ワークショップ：①で得られた知見をもとに、神戸芸術工科大学学生による実施案の作成⁸

このように、本研究は、住民が誇りを持てる魅力的な居

住空間のデザインを創出する方法を探求するとともに、学園南緑地の活用に関しても有用であると考えられる。これは、単に小規模の建物を緑地に建設するというのではなく、「方丈の庵」を地域の共有資源として構築することも意図したものである。以降では、その各段階を報告する⁹。

3) 「方丈の庵」に関する知識の共有

「方丈の庵」に関して、本研究では神戸芸術工科大学齊木崇人研究室所蔵の図面、模型、および関連図書を主な資料として用いた。また、「方丈の庵」に関する情報の共有方法として、地域住民に周知する企画「方丈行灯祭」および方丈跡地とされる京都市伏見区「日野外山」の現地見学会を実施した。

3-1) 「方丈行灯祭」

この計画は、例年、舞多聞エコ倶楽部が主催する地域イベントの蛍の鑑賞会と合わせて行った。この企画は、「あかり」から住まいを考えること、「方丈の庵」製作の企画が開始されたことの周知を目的としたものである。

実施内容は、「方丈の庵」の平面の大きさを持った「方丈行灯」の製作、舞多聞地区に群生する竹を用いた竹行灯の製作ワークショップ、ドキュメンテーションワークショップ、および鑑賞会である。「方丈行灯」は、簡易に組立て解体可能な木造軸組の金物構法として、「KS構法」¹⁰の構造体を採用し、神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科学生によって製作した。

夕刻より方丈行灯、竹行灯、ドキュメンテーション、学園南緑地に棲息する平家蛍の鑑賞会を実施した。結果として、近隣住民が多数参加し、約100名の参加が得られた。

3-2) 「日野外山」の現地見学会

方丈跡地とされる京都市伏見区「日野外山」の現地見学会を行った。これは、舞多聞エコ倶楽部および都市再生機構の主催で実施された。

見学会の当日は、方丈記のコピー、および神戸芸術工科大学が1992年に行った実測調査の資料をもとに、京都市伏見区「日野外山」の散策、跡地の見学を行った。

また、合わせて下鴨神社に復元された「方丈の庵」の見学会および見学会後の意見交換会を実施した。


<p>「方丈の庵」に関する知識の共有</p>	<p>6月17日</p> <p>方丈行灯祭 舞多聞まちづくり館</p>			
	<p>11月25日</p> <p>方丈跡地 (京都市伏見区日野外山) の現地見学会</p>			
<p>施工ワークショップ</p>	<p>2月6日～ 3月23日</p> <p>意匠設計案の 作成</p>			
	<p>2月6日～ 3月23日</p> <p>施工計画</p>			
<p>3月23日</p> <p>学園南緑地で 仮組の実験</p>				

図1 実施概要とスケジュール

4) 施工ワークショップ

上記の活動をもとに意見交換会を開催¹¹、基本計画を検討し、表1のような運用方針となった。

4-1) 意匠設計案の作成

基本計画をもとに、神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科所属の学生により、表2に関する意匠計画に留意しながら設計案をまとめた（図1中意匠設計案の作成）。

4-2) 基本計画案と施工計画案との整合

さらに、実施案のもと、神戸芸術工科大学環境・建築ラボラトリーにて「方丈の庵」の建築要素の検討、および部材の加工を行った¹²（表2、図1中施行計画）。

4-3) 施工ワークショップの実施

施工ワークショップは、平成25年3月23日に舞多聞まちづくり館の敷地内で行った。学園南緑地に建設予定のものものの仮組の実験として行った。

表1 基本計画

主体	学園南緑地美緑化ボランティア「舞多聞里山育成会」（舞多聞エコ倶楽部）、神戸芸術工科大学
用途	公園施設（環境教育の教室、休憩所）
場所	学園南緑地里山エリア（保全エリア）

表2 意匠設計と施行計画の概要

意匠設計：学園南緑地の環境に適応した空間構成	
配置計画	西側に大きな開口部を持つ構成
寸法体系	基本的な方丈の平面を生かし、部材の特性などを生かした天井高を確保する
開口部	壁と天井の開口部の配置によって方丈の空間に様々な光環境と温熱環境を生み出す工夫
建物立面	軒、軸組などによる水平性を生かしたものと壁面の見えがかりの検討
施工計画：自力建設が可能な「方丈の庵」	
軸組は方丈行灯で採用した「KS構法」を採用 床は厚手の構造用合板を用い根太を省略する 壁体は実加工された板をはめ込む 屋根はパネル化し、簡易なポリカ波板を用いる	

5) 研究結果と今後の課題

本研究では、「方丈の庵」を住まいの原形としてとらえ、それを地域と連携した建設として位置付けることにより、住まいのあり方とその思想を、様々な実践を通して学んだ。これは、建築を通じた地域学習のあり方としても新たな展開を示したと考えられる。今後は、本研究のまちづくりに対する効果について検証する必要があると考える。

謝辞

本研究は、元神戸芸術工科大学大学院の藤巻泰輝氏と、神戸芸術工科大学ラボラトリー職員の中村晴雄氏に多大なご協力をいただきました。ここに謝意を表します。

註)

1 「方丈の庵」は、鴨長明著の「方丈記」に示されている庵の通称であり、長明はその庵を拠点として生活したとされている。

2 建築分野では隈研吾建築都市設計事務所が「800年後の方丈庵」というパビリオンを建設している。

3 「方丈の庵」に関する研究は、神戸芸術工科大学開学前の昭和62年から行われており、その成果は参考文献1),2),3)にまとめられている。

4 以下、学園南緑地とする。

5 会員は学園南緑地美緑化ボランティア「舞多聞里山育成会」により構成されている。

6 開催日：平成24年6月17日、参加人数約100名、神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科所属の10名の学生により組み立てられた。

7 開催日：平成24年11月25日、参加人数17名

8 日程：平成25年2月6日～3月23日、参加学生：荒川純一、板谷宏太、高見康弘、土居瑞季、木村勇輝、柴田墨斗（全て神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科）、藤巻泰輝（元神戸芸術工科大学大学院）

9 当初は神戸芸術工科大学内に保管されていた部材（参考文献の研究の際に製作された部材）を再利用することを計画していたが、部材の欠損などがみられたため、今回は部材の発注から行うこととした。

10 「KS構法」は、プレカットされた木造軸組の構造体に埋め込み型の金物を取り付け、ドリフトピンを打ち込む構法であり、比較的簡易に組み立てが可能である。

11 平成24年12月20日および平成25年1月13日

12 木造の軸組構造およびその造作については、木構造生産技術研究所、(株)喜太郎による技術協力を得た。

参考文献)

1) 吉武泰水、「方丈記の建築的考察 1部：前編：方丈記における災厄について」社団法人日本建築学会、研究報告集 計画系 (62), pp117-120, 1992

2) 吉武泰水、「方丈記の建築的考察 2部：後編：<方丈>とその敷地について」社団法人日本建築学会、研究報告集 計画系 (62), pp121-124, 1992

3) 吉武泰水、「方丈記の建築的研究 3部：用語にみる主題の展開」社団法人日本建築学会、研究報告集 計画系 (63), pp185-188, 1993

4) 齊木崇人「鴨長明と方丈記とすまい」神戸芸術工科大学、スプリングトーク春のレクチャーシリーズ 01、2009

5) 堀内研自「方丈記にみる鴨長明「栖」をめぐる空間観の実験的考察」神戸芸術工科大学、1994.(修士論文)